育友会関東地区就職懇談会
ー神田キャンパスー

父母・学生239人が参加

▲熱心な父母たちで満席の303号教室

育友会関東地区の就職懇談会が９月１８日、神田キャンパスで行われ、合わせて２３９人が出席した。父母だけでなく、学生の姿も多く見られた。

大瀬利行会長のあいさつのあと、大和ハウス工業㈱の渡辺俊治人事部長が現在の採用状況について講演。引き続き、大日本印刷（株）に内定している國貞加奈さん（文４）、三井住友銀オートリース（株）勤務の久岡清太郎さん（平１６経営）の２人が就職活動体験談を披露。自らの活動スケジュールに沿って話を展開し、「自己理解を深め、まずは自分のやりたい仕事を見つけることが大切です」（国貞さん）、「周囲の動向に左右されず、自分で納得のいくように活動することが良い結果につながると思います」（久岡さん）と話した。最後に宮代茂就職部長が本学のサポート体制などを説明。

来場者からは「私たちの学生時代とはまったく状況が違うので、子供と話す時の参考になります。特に体験談は、活動の流れが分かり、有意義でした」（商３・男子の父）などの感想が寄せられた。

【ニュース専修2004年10月号9面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

支部懇談会、就職懇談会

支部懇談会、就職懇談会を終えて

育友会長 大瀬 利行

今夏も多くのご父母の参加を得て、無事に支部懇談会と就職懇談会を終えることが出来ました。育友会本部役員を代表し、お礼申しあげます。68会場延べ302人の教職員の方々にご出張いただき、ご負担も大きかったことと思いますが、この伝統は、続けていただきたいと願っております。私も皆さまとお話しさせていただき、どのようなことを望んでおられるか知ることが出来ますし、頑張っているご子女の様子を伺うことで、新たな学生支援のアイデアも浮かんでまいります。
懇談会の運営方法は、マンネリ化を防ぐために各支部で工夫していただいており、その情報をフィードバックさせて、より良い形の懇談会にしていきたいと思っております。「ニュース専修」を通じての情報発信のほか、育友会ホームページを活用し、情報の即時性と双方向性も高めていく必要があると考えております。
どのような分野でも結構です。育友会発展のために皆さまのご意見をお聞かせくださいますよう、お願いいたします。

支部懇談会、就職懇談会出席者アンケートから

就職体験談が好評

今夏46回目となった育友会支部懇談会は、全国68支部で開催され、父母会員2664人（同伴者含む）が出席した＝左表参照。午前中は大学、学生の動向を理解してもらうための諸説明が展開され、午後からは希望する父母を対象に個人面談が行われた。支部懇談会と就職懇談会の出席者アンケート集計結果から探ってみると――。

支部懇談会

個人面談において父母からの質問は、学業、資格、課外活動、就職、学生生活の各分野とも、内容は多岐にわたっていた。アンケートで父母からさまざまな要望が寄せられ、「個人面談を希望しない人も、グループで話が聞けるようにしたら良いのでは」「学年別の懇談会を実施するのも効果的」といった提言もあった。プログラムの中の「就職」に関しては「たいへん有意義だったが、もう少し時間を多くとってほしい」という意見から「もっといろいろな事例、複数の話があれば良かっ た」という注文も寄せられた。そのほかの大学からの諸説明に関しても多数の意見が寄せられた。
「学生本人の参加が可能であったことは知らなかった。就職、学業に関しては本人も来る方が良いのでは」「子供も含めて3者で懇談する機会も設けては」との要望もあった。

就職懇談会

就職懇談会は、東北（郡山）、九州（博多）、北海道（札幌）＝以上支部懇談会と併催、関東（東京）各地区とも好評で、体験談披露では、「たいへん参考になった」「具体的な採用状況が分かった」「生の声が聞けて良かった」「毎年続けてほしい」といった声が多数寄せられた。「むしろ失敗談が参考になった」（東北）、「親も共に就職を通じて子供と関わっていく姿勢が大切」（関東）との意見も寄せられ、「1社だけでなく、2、3社（異業種）の講演を聞きたかった」（同）との要望も。さらに学生の声として「就職活動は何から始めてよいのか分からずにいたが、出席したおかげで企業の採用の規準などが分かった」（同）などもあった。
今後の対応として、育友会本部常任役員会は、支部懇談会開催意義の理解と育友会活動への関心を深めていただくための情宣活動はもとより、会員からの質問、相談事項、支部からの要望及び本部役員、大学側からの出張者の意見を分析、検討し、施策に反映させ、同組織がより充実、発展するように努めていきたい――としている。

【ニュース専修2004年10月号9面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

都市をキーワードに講師6人が多角的考察

文学部公開講座

参加者の熱心な質問に 答える高岡助教授

香り高い市民講座として地域に定着し、ファンが増えている「第38回専修大学文学部公開講座」が10月2、3の両日、生田キャンパスで開かれ、市民、学生ら延べ約80人が参加。活発な質疑応答が展開された。

今年は「都市」をキーワードに、現代の発展する都市形態が、自然環境や人間生活にどのような影響を与え、また新しい思考や行動を促してきたかを6人の
講師が多角的に考察した。
1日目、高岡貞夫助教授（地理学）は、都市開発が進む中で、森林・緑地をめぐる環境がどのように変化してきたかを追究。
今野裕昭教授（地域社会学）は、近年市民グループによって展開されている「テーマ型地域コミュニティ」を例に、市民組織の新しい形を提起した。

ゲストに招いた千葉大学デザイン工学科の福川裕一教授（建築学）は、都市住民が、快適な生活環境を実現するために、起こすべき行動を示唆した。
2日目、秋吉美都講師（メディア論）は、都市生活者は日常のコミュニケーションの大きな部分を情報メディアに依存しているが、そのことが生活にどういう意味を持つかを論及。

坂野明子教授（アメリカ文学）は、大都市ニューヨークの変化と、文学作品の変化、両者の相互関係を明らかにした。
最後に、権田萬治教授（現代マスコミ論）がニューヨーク・ミステリーの歩みを、江戸川乱歩の作品に出てくる東京と交差させながら語り、講座を締めくくった。

【ニュース専修2004年10月号9面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.